コンピテンシー・ベースの授業実践集 Vo.2

「INTEGRATOR」で育てるコンピテンシー
ー各教科の授業実践ー

本校では、全教科・全科目でコンピテンシーを意識した授業づくりに取り組んでいます。
特に、本校が独自に整理した 10 のコンピテンシー「INTEGRATOR」を手がかりに、生徒が主体的・対話的に学ぶ授業をめざしています。こちらでは、その一部を「授業実践例」として紹介します。各実践が、どのコンピテンシーをどのように育成しようとしているのか、授業のねらいや工夫、生徒の様子とともにお伝えします。

総探　AIで創る地域の未来 – ChatGPTで徳島県西部の課題と解決策を考えよう–

担当：大久保 教諭

ねらい： N（課題発見力）・E（分析力）・R（情報収集力）を意識し、徳島県西部の課題について、自分たちでテーマを設定し、ChatGPT を活用しながら仮説と調査・実施計画を立案できるようにする。

授業の流れ・工夫

前時の内容を振り返り、本時の目的を共有した。グループで徳島県西部の課題を話し合ってテーマを決め、ワークシートにまとめたうえで、ChatGPT に問いかけるプロンプトを工夫しながらアイデアの改善点や追加案を得た。その後、1分間の発表に向けて要点を整理し、クラス全体で発表・質疑を行い、ルーブリックとフィードバックを基に計画を修正した。

生徒の様子・変化

最初は「人口減少をどうにかしたい」など抽象的な表現が多かったが、ChatGPT や RESAS・市町村のHPの情報を参考にすることで、「観光と交通を組み合わせた仕組み」「高校生が関われるイベント」など、具体的なターゲットや行動が含まれたアイデアへと発展していった。

教員コメント

ChatGPT を「答えを出してもらう道具」ではなく、仮説をブラッシュアップしたり別の視点を得たりするツールとして位置づけたことで、生徒が自分たちのアイデアを主体的に見直す姿が見られた。今後は、提示したルーブリックを事前共有し「どの観点を意識して活動するか」を生徒自身にも意識させたい。

英語家庭　FOOD WASTE を地域とつなげて考え、自分のアイデアを英語で伝えよう

担当：種盛 教諭

ねらい： T（協働力）・R（表現力）・TE（倫理的思考）を意識し、家庭科で扱う「食生活・福祉・消費者としての責任」と関連づけながら、食品ロスの現状やフードバンク、高校生の家庭クラブ活動の事例を理解し、地域の自治体・企業・生産者と協働して食品ロスを減らすアイデアを 英語で説明できる力 を育てる。

授業の流れ・工夫

導入で、食品ロスの定義や「事業系食品ロス」と「家庭系食品ロス」、フードバンクの仕組み、他校の高校生による実践例（規格外野菜の商品化や子ども食堂の取組）を英語スライドで紹介した。その後、講師の話から学んだことをワークシートに英語でメモし、ペアで共有した。個人で「誰と協働するか／どんな商品・サービスか／社会への効果」という３つの視点でアイデアを英語でまとめ、グループディスカッションでは MC・Reaction Maker・Note Taker・Reporter の役割を決めて英語で話し合い、最後に各グループの Reporter がクラス全体に1分間の英語プレゼンを行った。

生徒の様子・変化

はじめは「食品ロスをなくしたい」といった漠然とした表現が多かったが、スライドや講師の話を手がかりに、「imperfect vegetables」「food banks」などの語彙を使いながら、「地元農家の規格外野菜を活用した新商品」「廃棄予定食品を使ったイベント」など、地域とつながった具体的なアイデアを英語で説明しようとする姿が見られた。

教員コメント

家庭科の視点（食と福祉・地域とのつながり）を英語の授業に取り入れたことで、食品ロスを「自分たちの生活・地域の課題」として捉えながら、協働して解決策を考える姿が見られた。役割分担とフレーズ集を用意したことで、英語でのグループディスカッションにも積極的に参加できていた。